

湘南の由来とエリアを探る

その5

山水画に描かれた中国の湘南

-瀟湘八景-

和田精二

2017,06,15

5-1 中国の湘南=瀟湘 と「湘南」を繋ぐもの

前回、元祖「中国の湘南」とは、湖南省の洞庭湖と、そこに注ぐ湘江（湘水）と瀟水（しょうすい）が合流するあたりを指すこと、その地は、山紫水明の地「瀟湘（しょうしょう）=中国の湘南」として名高きばかりでなく、伝説や神話に彩られた地でもあったこと、そのため、屈原、李白、杜甫等の詩文でも賛美され、当時の中国人には特別な思いのある地であったことなどが分かりました。以上から、この地域が今回のテーマである「山水画」の画題として描かれる条件が揃っていたことが分かります。禅僧を経て日本の「湘南」の由来を明らかにする文脈へ繋いでいく布石として、元祖「中国の湘南」がなぜ山水画の



図1 湘南地域 [湖南省]2017,5,8,22:27Wikipedia 日本語版に著者が追記

対象となったのか？ 誰が描いたどのような「山水画」が日本に渡り、「日本の湘南」の実現に繋がっていったのか？ 等々、今回はそのプロセスを再び湖南省を舞台に考察してみたいと思います。

5-2 山水画の発展と瀟湘（しょうしょう）

西洋と同じように中国でも唐代までは皇帝や聖人・賢人などの人物画が絵画のテーマの中心でした。ところが、宋朝が再び中国統一を成し遂げた10世紀半ば以降、絵画の主役は山水画や花鳥画へと徐々に変化していきます。山水画の発展は、筆のストロークと墨の自在な使用によって山や樹木、水や大気をも描き上げる水墨技法の進歩とともにありましたが、その対象として「瀟湘」の地が好まれたのは、前述の通りこの地域に対する当時の中国人の特別な思いがあったようです。「瀟湘」と山水画の関係を考える上でもう1つ重要なのが、背景に宋代から本格化した「科挙」とこの制度によって広がったエリート官僚士大夫を含む文人による教養主義の高まりがありました。



図2 [科挙] 出典：2017,6,10,16:00 Wikipedia 日本語版

5-3 科挙制度と士大夫（したいふ）

「科挙」制度とは、貴族階級のみが政府の役職を独占する弊害をなくし、家柄や身分に関係なく才能ある個人を官吏に登用することを目指した制度です。学識のみを問う試験ですが、合格率が極めて低いため、幼少時より労働せずに学問に専念できる環境づくりや、膨大な書物の購入費、教師への月謝などへの投資が必要となり、実際に受験できる者の大半が官僚の子息または富裕階級に限られました。それでも、唐の時代に我が世の春を詠っていた世襲の門閥貴族が完全に没落し、誰もが受験資格をもち、合格すれば名誉と権力と経済的保障を得られる流動的な社会に代わった訳で、当時としては世界的にも画期的な制度でした。

この制度は、隋の賢帝・楊堅（文帝）が初めて導入したものの、その後の隋・唐の時代にはまるで進展せず、北宋の時代に入ってから本格的に定着しました。科挙によって登場した官僚たちが新しい支配階級である「士大夫（したいふ）」を形成、中

中央集権体制のもとで政治・経済・文化の中核を担いました。この「士大夫」といわれる知識人が文化を支配する社会となりましたが、士大夫のライフスタイルが人々の憧憬を集めるようになると、宋以後の文化は士大夫たちの価値観やそれに基づく文化や趣味生活が時代を先導するようになったのです。今では全く信じられないことですが、かつての中国社会には、教養を基



図3 明時代の士大夫：出典：[士大夫]2017.06.04.21:14 Wikipedia 日本語版

本に置き、教養人が政治や文化を支配するという建前が通じた時代がしっかりと存在していたのです。

5-4 文人・士大夫のライフスタイルを真似る市民

やがて「士大夫」をも包含する層として「文人」という階層が形成されました。この場合の「文人」とは「学問を修め、文章を能くする人」を意味します。さらにつけ加えるならば、儒家としての人文的教養を身につけ、支配的・指導的な立場（官僚・地主・地方豪族等）にあることを条件としたようです。こうした文人・士大夫のライフスタイルを説明した文章がありますので引用してみます。「花鳥・山水画を読み解く」宮崎法子

『書齋に香をたき、薫り高い花を花器に盛り、簡素で清らかな空間を演出する一方、読書や詩文を書くこと以外にも文人のたしなみであった琴をつま弾き、茶を楽しみ、書画を鑑賞し、庭に鶴を放し、池に魚を放ち、奇石や竹、花木草花を配し、室内にも盆栽、盆石を飾るといった具合に、文人としての価値観に沿った生活と文化が確立していった。批判もあったにせよ、士大夫たちが主人公となった文化の具体的な形とスタイルが、宋代を通じて形成され、その後の中国文化の定型となっていっ

た。』

筆よりも重たいものを持たないことを誇りとし、知的で優雅なライフスタイルに徹していた士大夫を羨望のまなざしで見ている市民も、教養の第一歩として書を学び、書画も芸事のひとつとしました。興味深いのは、宋代以降盛んになった禅宗も文人文化の影響を強く受け、喫茶等の多くの点で文人のライフスタイルに倣っていたことです。日本には中国の文人文化が禅宗という窓口を通し、「禅宗文化」として伝わった、という指摘（宮崎）はやがて「湘南」に繋がっていくこととなります。



図4 科挙：出典：「殿試の様子」2017.06.04.22:14 Wikipedia 日本語版

『中国の知識人は、何かしら心が動いた時、出会い別れ、集いに際して詩を詠み、贈り合う習慣があった。それは社会生活を営むうえで必要なマナーであった。このような習慣に従って優れた絵画作品に接した時、知識人は詩を詠んだ。画に対する詩（題画詩）は詩の1ジャンルとなった。』

『士大夫たちは、友人との集まりの場や、送別や遠来の友を迎える折々に、必ず詩を詠み、交換した。それは彼らの社会生活の基本的なマターであった。（略）やがて、文人たちの中に山水画を描く者が現れるようになると、当然、絵画そのものが重要になり、寄せられる詩も、描かれた土地ばかりでなく、その画そのものに対して詠まれる要素も大きくなる。しかし、実景山水の場合、基本的に描かれた土地への関心が作画の重要な契機になっている。文人の山水画はそのような文人の交流の場から生まれたと思われる。』

この項の最初に文人の条件として「学問を修め、文章を能くする人」とありましたが、「文章を能くする」とは、文章作成能力に加えて能筆であることも必要だったようです。文人・士大夫たちにとって書は必須の教養であり、技芸ですが、絵画も専門画家や画工たちの手から文人たち自らが表現者となる芸術へと展開していきました。絵画も書と同じように個人を評価す

るものへと変化したのですが、日本に渡来した禅僧がこうした習慣を日本に伝え、伝播させたことが推定できます。

そんな時代に、機を同じくして山水画が発展しましたが、それを支えたのが、この時代の文化をリードすることになった文人・士大夫でした。彼らは、自らのあり方や精神を反映させた新しい芸術を教養として求めました。それは唐代までの華麗で贅をつくした貴族趣味の芸術とは全く異なる新しい芸術であり、彼らの儒教的な価値観、質朴の美や精神性を尊ぶ心情に叶うもの、すなわち山水画だったのです。山水画はこのような新しい時代の到来とともに発展しましたが、文人・士大夫が求めた新しい芸術観と山水画がうまく融合できたことは理解できます。唐代までの華麗で贅を尽くした芸術と違い、儒教的な価値観、質朴の美や精神性を尊ぶ心情に叶うものがあつたので、禅宗が士大夫に支持されたのも納得いきます。

5-5 宋迪（そうてき）が仕掛けた「瀟湘八景」

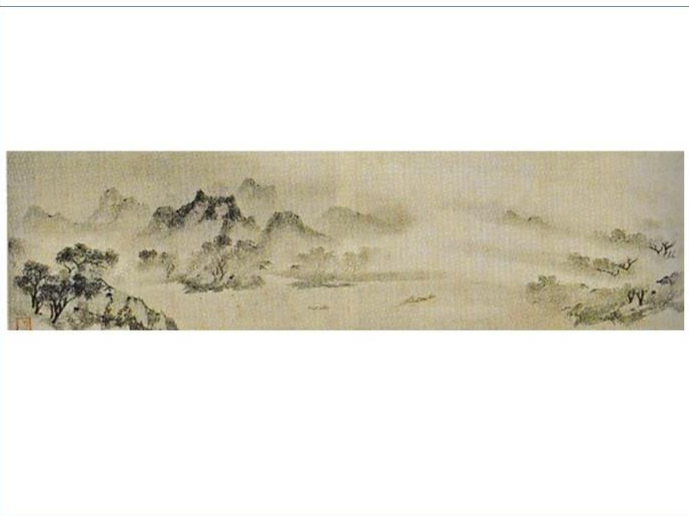


図5 牧谿(もっけい)瀟湘八景の内の「漁村夕照図」出典：宋王朝と新文化

こうした時代背景の中に登場するのが、「瀟湘」の地に北宋の官僚として赴任してきた「宋迪（そうてき）」です。宋迪は、赴任地の湖南・長沙が他にもない、中国人羨望の地「瀟湘」であることを充分計算し尽くしたうえで、山水画「瀟湘八景」を描きました。宋迪の名が後世にまで残るのは、彼の描いた山水画自身ではなく、題材を「瀟湘」とし、「八景」という新しい絵画形式をふまえて山水画に仕立て上げた企てにありました。

「瀟湘八景」は、4字句のテーマを八幅の名所に仕立てあげたものですが、分かりやすくなじみ易いこともあって流行し、

その後も山水画の代表的画題として用いられました。牧谿（もっけい）・王洪・馬遠らがそれぞれ名作を描いています。このうちの禅僧・牧谿（もっけい）による「瀟湘八景」（平沙落雁・遠浦帰帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照）は日本に運ばれ、室町時代の水墨画に大きな影響を与え、長谷川等伯など多くの追随者を生みました。牧谿は、日本の水墨画に大きな影響を与え、日本の絵画史の中で最も高く評価されてきた画家のひとりで、国宝・重要文化財に指定された作品も多い人物です。牧谿については、稿を改めて説明しようと思います。

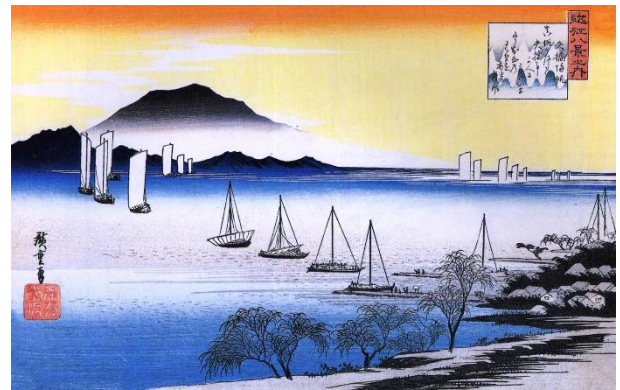


図6 歌川広重「近江八景 矢橋帰帆（やばせのきはん）」出典：Wikipedia



図7 歌川広重「金沢八景 小泉夜雨（こすみのやう）」出典：Wikipedia

瀟湘八景は室町以降の日本でも流行し、雪村・相阿弥・狩野永徳・狩野山楽などに受け継がれました。明治以降では横山大観の「八景画」や、横山操の「瀟湘八景画」があります。近江八景はこの瀟湘八景をそっくりそのまま琵琶湖に移して真似しようとしたものです。このように数を冠した適度に文学的で詩的な「名数表現」は金沢八景等も生み出しました。湘南の近辺では、「茅ヶ崎八景（江戸時代の横浜市都筑区版と明治時代の茅ヶ崎市版がある）」や「相模川八景」などがあります。その他に日本三景（松島・天橋立・宮島（厳島））等も名数表現例です。

5-6 「瀟湘」という特別な地域

もうひとつ、「瀟湘」の地の名声を高めた山水画の名品「瀟湘臥遊（がゆう）図巻」（東京国立博物館）を紹介します。この山水画は禅僧・雲谷が自ら描いたものではなく、かつて巡った「瀟湘」の地の風景を画家の李氏に描かせたもので、「雅集」と称する禅宗のサークルに居士（こじ・在家の信者たち）を集め、この山水画を愛でながら心を解放させ、語り合うために「瀟湘臥遊図巻」なる山水画を使用したといえます。

文人・士大夫たちと同じような山水画を用いた文雅の集いが、江南の1地方の無名の読書人たちの間でも行われていたことが注目されますが、そこでも「瀟湘」が特別な地域として憧憬をもって語られていたことが注目されます。文士・士大夫たち



図8 「瀟湘臥遊図巻」 出典：文化遺産オンライン 2017.06.08.18:45

の交流の仕方や価値観が、士大夫層を超えて、南宋はじめにこのように広まったことを示す事例ですが、この作品の題になっている「臥遊（がゆう）」という言葉こそが、文人にとっての実景山水の重要性を示す鍵になるといえます。

「臥遊（がゆう）」の意味は、床に臥しながら旅行記を読んだり地図や風景画を眺めて自然の中に遊ぶことですが、六朝時代の画家・宗炳（そうへい）の故事に遡ります。宗炳は山水を好み、湘水に近い衡山にも隠棲していましたが、晩年体調を壊して帰郷、名山歴訪をできない我が身を嘆き、かつて訪れた地を壁に図し、坐臥してこれに向かったといえます。宗炳は、山水画に寄せた序文「画山水序」を書きましたが、彼の実践した「臥遊」はその後の文人たちの山水画観の基本的理念となったといえます。

こうして、文人にとっての山水画は、実在の地の風景に代わる役割を担う絵画へと昇格し、文人に代わって専門画家が描いた山水画でも、それを鑑賞する精神は宗炳の「臥遊」に連なる行為となりました。ここに、「瀟湘臥遊図巻」はそのような役割を果たす山水画として注文され、地方の読書人の「雅集（集い）」の中心として鑑賞されることになったのです。ここでも、「瀟湘」の地が画題になっていることが注目されます。

その後も、「瀟湘」を冠した「瀟湘図巻」（上海博物館）や「瀟湘奇観図巻」（故宮博物館・北京）などの山水画の名作が生まれましたが、「瀟湘」という画題は、宋代初期の文人山水画の画題として明らかに特別な意味を持ち、特に重要なものだったことが理解できます。

5-7 禅僧に影響した士大夫の文化

さて、ここで強調しておきたいのは、「瀟湘」の地が「文人・士大夫」の強い思いによって「山水画」に描かれたという史実ですが、もうひとつ注目したいのが、「山水画」と「禅僧」の関係です。宋代以降、民間に浄土宗が広がり、盛んになった一方で、儒教的な価値観、質朴の美や精神性を尊ぶ士大夫層に禅宗が支持されていきます。単に王朝の変化だけではなく、国家を支える政治・経済構造と人的要素である官僚組織が大きく変化した結果、皇帝中心型の中央集権国家を形成した宋朝では、宗教としては中国古来の儒教を根本におきましたが、理知的性格が強い禅宗もインテリ志向が強い士大夫階級と考え方の上で通底していました。その結果、今回の文章にたびたび登場するように、士大夫文化に影響された禅僧が「山水画」を描いたり、それを活用して「雅集」に信者を集めたりしています。同時に、文人・士大夫文化に強い影響を受けた禅僧は、茶道・華道・書道・庭園（作庭）法などの技法を獲得し、それぞれに目的・意義・実践体系の各要素を付加して、一種の芸術の立場を獲得していきました。宋代以降の中国仏教、特に禅宗が日本文化の表層に与えた影響は、衣食住を中心とした日常生活文化の上で、唐代仏教のそれを凌駕した強烈なものでしたが、日本における話は次回以降にしようと思います。■

■ 出典資料

- ・花鳥・山水画を読み解く 宮崎法子 角川書店 2003
- ・日中を結んだ仏教僧 頼富本宏 農山漁村文化協会 2009
- ・中国絵画入門 宇佐美文理 岩波新書 2014
- ・宋王朝と新文化 梅原郁 講談社 1977

- 図1/図表：[湘南]2017,06,04,22:14 Wikipedia 日本語版
- 図2/写真：[科学]2017,6,8,16:00 Wikipedia 日本語版
- 図3/写真：[士大夫]2017,06,04,21:14 Wikipedia 日本語版
- 図4/写真：[科学]2017,06,04,22:14 Wikipedia 日本語版
- 図5/写真：宋王朝と新文化 梅原郁 講談社 1977
- 図6/写真：[近江八景] 2017,06,10,22:18 Wikipedia 日本語版
- 図7/写真：[金沢八景] 2017,06,10,22:25 Wikipedia 日本語版
- 図8/写真：「瀟湘臥遊図巻」文化遺産オンライン 2017,06,08,

18:45